

「高額当選しちゃいました」

阿部凌大

登場人物

小野寺 彰^{あきら} (23) フリーター

今川 俊 (23) フリーター

春日 司 (23) フリーター

川上 潤 (23) フリーター

○シェアハウス 彰の部屋

1月3日 朝

スマホのアラームが鳴り、ベッドの上で起き上がる小野寺彰（23）。

窓際には大きな鳥かごが置かれ、中には四羽の白い鳩。

彰、籠の入り口を開け、鳩に餌を与え始める。

彰「おはよう。ほら朝ご飯だぞー。……そうだ、お前らさ、今度からこの餌、もっと良いやつに変えてやるからなー、楽しみにしとけよー」

すると突然、籠の中の四羽が暴れ始める。

彰「え、うわ、ちよっとお前ら！どうしたいきなり！待て待て喧嘩するなって！」

籠の中の水入れが鳩に弾かれ、籠の入り口から外に飛び出し、割れてしまう。

彰「まじかよー。新年早々縁起悪いななんか……いや、まあいつか、てか全然いいか！

お前らー、こんな皿ならいくらでも割って
いいからなー（にやつきながら）

その時、ドタドタと誰かの足音が近づ
いてくる。

部屋の扉が勢いよく開かれ、駆けこん
でくる川上潤（23）。

彰「あ、潤おはよう。どうしたんだよそんな
慌てて」

潤「……無い」

潤の表情は茫然と。血の気が引いたよ
うな。

彰「……無いつて？」

潤「当たりくじ」

彰「待って、落ち着け、どういうこと？」

潤「だから今起きて！確認したら無い！どこ
にも無い！」

彰「嘘だろ」

潤「彰お前持ってた？」

彰「知らないよ。俊か司じゃないの？二人
は？」

潤「多分まだ寝てる」

彰「とりあえず起こそう！」

彰と潤、おぼつかない足取りで部屋を
飛び出す。

○同・俊の部屋

布団の上で寝ている今川俊（23）。

部屋の中にはパソコンやプリンター、
画材など、様々な物が置かれ、カオス
に散らかっている。

彰「俊！起きろ！早く！」

大声と共に部屋に入ってくる彰、俊を
叩き起こして。

俊「……何？」

彰「宝くじ持ってるのって俊？」

俊、彰の顔をじっと見つめて。

彰「リビングにあった当たりくじが！無くな
ってるんだって！だから俊か司のどっちか
が、部屋に持っていてるんじゃないかっ
て！なあ持ってるよな！？当たりくじ！」

俊「……いや、持ってないけど。てか無くな
った？」

○同・リビング

小さなテーブルが中央に置かれ、あと
は雑多な物に溢れている。

必死でリビング中を探している潤と春
日司（23）、そこへ部屋を出た彰と
俊が合流。

リビングからは玄関やトイレ、浴室、
そして四人それぞれの部屋へと繋がっ
ている形。

彰「俊も知らないって」

潤「司も同じ。まじでどこいったんだよ」

俊「それじゃなくて？」

俊、テーブルの上を指さして。そこには
宝くじの入った紙封筒が。

潤「ここに入ってるのは外れた分の9枚だけ」

司「まじでどこだよ。10億だぞ10億！」

彰「昨日も言ったけど7億だって。10億は

前後賞込みの話。俺らが買ったのはバラで
前後賞は無いから、当たったのは7億。て
か宝くじ買いに行つたの司じゃんか」

司、低いため息をついて。

司「誰も持ちだしてないんだよな？」

俊「うん」

潤「だからみんなそう言ってるって」

司「俺らが昨日寝た時、当たりくじはこの封
筒に入れたままだったはずだよな？」

彰「そのはず」

司「なのに誰も持ちだしてないって。おかし
いだろ、どう考えても」

彰「…何が言いたいのか？」

司「分かるだろ？この中の誰かが、盗んでん
だよ！」

○シェアハウス リビング 前日

1月2日 夜

酒を飲み、楽し気に騒ぐ四人。

司「あけえーましてー、おめでとー、ござ

「いやすー！」

彰「もう分かったから。何回目だよそれ、もう二日だから」

潤「なんか今年は上機嫌だな司は」

司「お前ら、今年の抱負とかあんの？」

俊「いきなりなに、そういうこと言うタイプだっけ？」

司「いいから言ってけ、ほらお前から」

司、俊を指さして。

俊「俺？俺は、まあ今年こそ、アート一本で
ご飯食べれるようになりたいって感じかな」

司「お前は？」

司、潤を指さして。

潤「俺も俊と一緒にだよ。俺は歌一本で飯を食
う（傍らのギターを手に取りながら）。

そろっとこの部屋も出たいし」

彰「え、潤シェアハウス嫌なの？」

潤「いや、お前らといるのそりゃ楽しいし楽
だけど、けどいつかはさ、もっと広い部屋
に一人で住みたいじゃん」

司「いつか、いつかな」

司、潤を見て馬鹿にしたように笑う。

潤「なんだよ。だってもう何年だ？今年24だから、もう5年とか6年だろ？」

彰「俺は誰が成功しても、ずっとこの四人でシェアハウスしてたいけど」

司「誰かが成功（皮肉っぽく言う）」

潤「お前さ、さっきから、」

司「じゃあお前は？（彰を指さして）」

彰「俺も、早くマジシャン一本で生計立てた
いってのは勿論だけど（テーブルの上のトランプを手にしながら）、後は、親孝行、
したいかな」

俊「俺ら親なんかないじゃん」

彰「そうじゃなくて、親みたいな存在だった
らさ、俺らにもあるわけじゃん？」

潤「ああ、青空園の話ね」

彰「そうそう。俺らがここまで大きくなれた
のも、青空園のおかげだろ？だからそのう
ち恩返ししたいじゃんか」

潤 「まあ、わからんでもない。今年もなんか来てたよな？」

俊 「ああ、それ」

俊、テーブルの隅を指さす。そこには一枚の年賀状。青空園の外観写真と、『あけましておめでとう 今年もよろしくね』というメッセージ。

潤 「俺らここで出会って今までだもんなあ。何年くらい？」

俊 「うーん、入所したタイミングはみんなバラバラだからわかんないけど、軽く10年以上は確実」

潤 「なんか引いちゃうな」

彰 「なんで」

潤 「だってこんな小っちゃえ頃からよ、知ってる俺らが、二十代もいよいよ中盤に差し掛かろうっていう今も今まで、こうやって仲良くやってきちまったっていう」

彰 「だからこれがずっと続いてほしいじゃん？」

俊「児童養護施設から、老人ホームまでずっと一緒」

潤「嫌だよそんなの、いよいよ気持ちわりい」

彰と俊と潤、笑って。

俊「それで彰の言う親孝行ってのは、寄付みたいなこと？」

潤「何、青空園ってそんな金無いの？あー、確かに俺らのいた頃よりぼろくなってる気がするな（年賀状の写真を眺めながら）」

彰「いや、ちよつと調べたんだけど児童養護施設って主に税金で運営されてるから、運営自体は多分大丈夫。外観工事とかはどういう扱いになるか知らないけど」

潤「あ、そうなの」

彰「だからなんか上手い方法でさ、恩返し出来たらいいなって思うんだけど。あ、それで恩返しとはちよつと違うんだけど、最近見つけたやつが一個あってさ、ちよつと待って（スマートフォンを操作し始める）」

潤「いやあー、けど今年こそはなんかいけそ

うな気すんだよな」

俊「分かる」

潤「だよな！だから俺は今年多分紅白出ちゃ

うよ！」

司「……くだらねえなお前ら」

彰、俊、潤の3人、司の方を振り向く。

潤「……今なんつった？」

司「くだらねえなお前ら、くだらねえなお前

ら。はい馬鹿にも分かるように二回言いま

した」

潤「お前、」

司に掴みかかろうとする潤を彰が止め

る。

俊「……司だってさ、俳優になるって夢ある

じゃん。青空園にいる時からずっと言っ

た夢が」

司「だから俺の抱負が！いや、これは報告だ。

それかお前らに対する宣告か」

彰「なあ司、今日ちよつと悪酔いしすぎ」

司、手元の酒を一気に飲み、空のグラ

スを思いきりテーブルに打ちつけて。

司「俺は、辞める」

潤「は？本気かよ」

司「本気に決まってるだろ。てかお前らの方が本気かよ？叶うわけもない夢持ってるがむしやらに生きる。そんな自分に酔って気持ちよくなって。それってよ、言うなれば全部娯楽だろ？俺らもう24だぞ？そろそろ見切り付けて、諦めろよ。無理なんだからそんなもん」

潤「てめえ忘れたのかよ！18でこの部屋住み始めた時、何が何でも！全員夢叶えてるぞって！全員金持ちになるぞって！」

司「全員金持ち？」

司、また馬鹿にしたように笑って。

潤「そうだろうが、それまで諦めねえんだろ
うがよ！」

彰「ちよっと待って！一旦もう止めよう！そ
つか酒が良くないんだな、酒がさ、ちよっ
とみんな飲みすぎてる」

彰、司と潤の間に入って話を遮って。

彰「……そうだ、宝くじ、宝くじみようよ！」

俊「え、いや、まあ、それがいつか、そうし

よう！司、宝くじってどこ？」

司、テーブルの下から宝くじの入った

紙封筒を出す。その紙封筒の口は既に

空いており、彰、そこから10枚の宝

くじを出す。

司「どうせ今年も当たりやしねえよ」

彰「いやいや、共同購入の夢を今年こそさ。

一人750円の夢を。ほら、潤も一緒に見

ようぜ」

彰、潤に手招きし、俊と共に3人で宝

くじの当選確認を始める。

司からは少し離れて。

司、酒を飲みながらそんな三人の背中

を眺めている。

潤「そーいやお前ちゃんと750円払った？

催促されてただろ」

彰「え、ああ、払ったよちゃんと、ねえ？」

彰、司の方を振り返って。

司「ん？あー、貰った貰った」

彰「な？さあ見よう見よう」

彰、スマホで当選結果を調べる。

潤「あれ、今回って連番で買うんじゃないか？
たっけ？司買い間違えたんじゃないか？」

司「あ？」

俊「いや、今年もバラで買おうって言ってた
気がするなー」

潤「あ、そう」

彰「じゃあ一等から見ろ？」

彰、宝くじを並べ、一等の番号と順に
確認していく。

彰「今年の一等は、えっとまず184組の」

潤「184？これじゃね？」

潤、並んでいた10枚から一枚だけを
取り出して。そこにある番号は136

895。

彰「それで番号は、1、3、6、8、」

彰の告げる数字を順に聞きながら、次

第に目を見開き、手を震わせていく潤。

彰「……9、5」

俊「……嘘だろ」

潤「……当たってる」

彰「え？」

潤「当たってんだよ！一等！」

司「は？」

三人に駆け寄る司。

彰「待つて待つて、嘘だ！確認！もう一回確

認！」

潤「当たってるって！」

彰「だから確認！184組の！」

潤「184組の！」

彰「1、3、6、0、」

潤「1！、3！、6！、0！、」

潤、彰に続いて番号を絶叫していく。

潤「……5！当たってんだよ！」

飛び跳ねる潤、茫然とする彰と俊、後ろから来た司は宝くじをひったくるとそれを凝視。

潤「おい司！」

司、びくつと身体を震わせる。

潤、司に飛びつき、強いハグ。

潤「これ買ってきてくれたの司だもんな！
—
等っていくら？何億？一人いくらよ？」

彰「7億。だから一人、」

俊「1億7500万だね」

潤「もう司くん大好き！」

彰「……えー」

俊「地獄の沙汰も、金次第過ぎない？」

信じられない顔で宝くじを見つめ続ける司。

× × ×

バカ騒ぎをしながら酒を飲む四人。

× × ×

司「じゃあちよつと行ってくる」

バカ騒ぎの最中、立ち上がり、玄関へと向かう司。

潤「どこに？」

司「バイト先」

彰「なんで？」

司「決まってるんだろ（にやりと笑って）。バイト辞めてくる」

潤「マジかよ」

潤、ツボに入ったように笑って。

司「10億当たったんだぞ、辞めるだろそりや」

彰「10億じゃなくて7億。けど連番だったらねー。前後賞の1億5千万、1億5千万で10億だったのに。てか司のバイト先って今日もやってるの？」

司「飲食だからあんま関係無し」

潤「せっかく年末年始シフト入れなかったのにな。電話するんじゃダメなの？」

司「いや、こいつらたかだか時給1000円ぼっちのためにわざわざ正月休み返上してるんだなあって、優越感に浸ってくる」

潤「やっぱお前性格わりいな」

潤、腹を抱えてまた笑う。

司「まあな、じゃあとりあえず」

俊「いや、けど辞めるまでしなくていいんじゃない？お金あってもさ、趣味みたいな感じで続けられいいんじゃないかな。だって前に言ってたじゃん、今のバイト結構好きだって」

司「あー、んー、いや、いってきます」

司、手を振って出ていく。

○シェアハウス リビング

1月3日 朝

司「それで俺が帰ってきてからもしばらく飲んで、最後は全員それぞれの部屋に戻って今の今まで眠ってた。間違いないよな？」

彰、俊、潤、みな頷き。

司「だが当たりくじは抜き取られてどこかへ消えた。これはこの中の誰かが、嘘をついてて、当たりくじを盗んでいるってことだ」

潤「……俺らの中にそんなやつが？ありえな

いだろ」

俊「そうそう。どうせこの部屋のどっかに紛れてるだけだよ。ほら、俺らよく物とかどこいったか分からなくなるじゃん？」

司「だから当たりくじだけが抜き取られてんだよ！」

司、宝くじの封筒を見せつけながら。

潤「本当に誰も知らないわけ？」

黙り込む四人。誰も言葉を発しない。

司「決まりだな。この中に裏切り者がいる」

俊「裏切り者って」

リビングから出て行こうとする彰を、

司が呼び止めて。

司「おい、何してる」

彰「何って、トイレ行くだけだけど」

司「その前に身体検査するぞ」

彰「身体検査？」

司「当然だろ。この中の誰かが当たりくじを隠し持ってた。今お前が持ってた、トイレ行くフリしてどっかに隠しちまうか、そ

れかどっかに落とすといて全部うやむやにするつもりかもしれない」

彰「そんなわけないだろ。司ちよっとおかし
いって昨日から、どうしたの？何があった
んだよ？」

彰、助けを求めるように俊と潤を見る
が、二人は彰の顔をじっと見るだけで。
彰、諦めるようにうなだれて。

× × ×

四人、円陣を組むように立ち、それぞ
れ上着を脱ぐと右隣に渡し合い、渡さ
れた上着を念入りに確かめ始める。

その後Tシャツやシャツ、ズボン、靴
下も同様に。

パンツ一丁になる四人。

彰「パンツも？…：…だよな」

空気を察し、苦笑いする彰。

彰「三が日だよ？まだ」

○トイレ

トイレに入り、鍵を閉め、息をつく彰。
既に服は着ている。

彰、用を足すわけでは無く、便座の裏
から一枚の紙を取り出す。

それは一枚の宝くじ。そこには184
組の136895。

彰、うなだれながら深いため息をまた
一つ吐いて。

○同・彰の部屋

司、潤、俊の三人が彰の部屋中を漁り
まくっている。訳の分からないマジッ
ク道具を手に取り、目を細める三人。

彰、そんな三人を不安そうに見つめて。

司「これは？」

司、箱のようなものを彰に見せる。

彰「ああ、それは仕掛けがあって」

彰、司から箱を受け取り、軽くいじる。
すると箱の蓋が開き、中は空っぽ。

彰「残念だけど空っぽ。けどこうすると」

彰、箱を閉め、何度か蓋をさする。

そしてもう一度蓋を開けた瞬間、中から鳩が飛び出して来る。

驚き、のけぞる司。

司「うおっ！」

彰「（笑いながら）なかなか凄いでしょ？」

潤「もしかしてこれもこれも、そういう仕掛けあたりする？（手元のいくつかを示しながら）」

彰「うん、まあ」

潤「待って、そしたら彰は後回しにしようぜ。こんなの一個一個見せてもらってたらキリ無いだろ」

俊「相当複雑な隠し方されてたらお手上げだしねそもそも」

彰「いやいや、嘘つく意味無いから」

潤「嘘つく意味無いか分からないから」

何も返せない彰。

司「めんどくさいから全部壊すか？」

彰「は？どういう意味？」

司「全部バラバラにして中身みりゃあ、それが一番早いだろ」

彰「それで人の物壊すってわけ？」

司「当たりくじさえ見つけりゃ全部解決だろ。そんなもん、全部買い直してやるよ。10億だぞ10億」

彰「だから前後賞無いから7億だって」

潤「そーいや一人何億になる？」

俊「1人頭1億7500万でしょ？」

潤「いや、それは4人で分けた場合だろ？けど盗んだやつはさ、貰えるわけなくね？だから7億割る3人、いくらになる？」

彰「2億と、3000万ちよい？」

潤「けど見つからなきゃ犯人だけがこっそり7億」

司「じゃあ壊すぞ」

彰「待ってって！」

俊「いや、とりあえずそこまでしなくていいんじゃない？だってこれって思い出とか愛

着とか、相当詰まってるやつでしょ？」

司「物は物だろ」

俊「だから取り返しが、付かない物だってあるでしょ？」

潤「じゃあとりあえず後の三人の部屋見て、そこに無かったら、彰が犯人ってことでいいんじゃない？」

彰「はあ？それこそ勘弁してくれよ」

司「そうになったらこの鳩どもの内臓までひっくり返して調べる」

彰「待ってって」

潤「あとこれは？」

潤、写真立てを手に取って。

そこには幼少期の四人。その後ろにはマジシャンらしき大人が一人。

彰「ああ、それはただの思い出じゃん。懐かしいだろ？」

俊「ほんとだ、まだみんな小っちゃいね」

彰「マジシャンのおじさんが青空園に来てくれて、マジック見せてくれた時の写真。俺

がマジックに出会った日」

俊「それでマジシャンになろうって思ったんだっけ？」

彰「いや、正確に言うところとちよつと違って」

潤「なあなあ、この写真に手かざしてさ、写ってる俺ら消してみて」

彰「あのさ、マジックって魔法じゃないから。あと思い出は、どうやったら消せないから（写真に何度か手をかざして）」

彰、近くにあつたトランプを一枚手に取って3人に見せる。それはダイヤの2。

彰「今出来るとしたら、これぐらい」

彰、カードを裏返し、トランプの山札の上にその手をそつとかざす。そしてもう一度その手のカードをひっくり返すと、カードはジョーカーに変わっている。

目を丸くする彰以外の三人。

彰「すり替えマジック。俺が一番得意なやつ」

彰、見せつけるように三人に笑って。

彰「俺が一番最初に覚えたのもこのマジックで、これ見せたら三人が、凄い褒めてくれたから、嬉しくて、それでマジシャンになろうって思ったんだよ」

彰、笑顔のままだが、その顔はどこか悲し気で。

○同・潤の部屋

部屋内を探しまわる司、彰、俊の三人と、それを見ている潤。

部屋にはギターケースが一つ、棚にはCDや楽譜など。物は比較的少なく、片付いている印象。

潤「ほら、俺の部屋は何も無いだろ？」

CDケースの中などを一つ一つ開けている3人。

司「これは？」

司、ギターケースを指さして。

潤「これは普通にギターケースだろ。このギ

ターは俺の命」

司、中からギターを取り出し、ギターケースの中を覗くが他には何も無く。

司「……無いな」

潤「だろ？俺じゃないって」

俊「あ、これ懐かしい。コスモス」

俊、一枚の古い紙を掲げて。そこには汚い字で歌詞が書かれ、題名にはコスモスと。

潤「わー、懐かしいけど恥ずかしいやつ。それ今関係無いからもういいって」

潤、恥ずかしそうに紙を取り上げようと。

彰「なんだっけ、咲いてー、咲いてー、だっけ？」

俊「いや、ちよつと違うかも」

俊、潤の手を避けながら紙を読んで。

司「咲くよー、咲くよー、コスモスが、咲くよー」

司、コスモスを歌いだす。それは童謡

のチューリップのメロディー。

にやりとしながら笑う司をじっと見つ

める潤。そして潤も笑って。

潤「なんで覚えてんだよ。てか待て、恥ずかしいからもうやめろって。俺の初作詞作曲

ソングのコスモス！」

彰「深刻な顔して俺らのこと園の裏側に呼び出してさ」

俊「何かと思ったらおもちゃのギター持っててね」

司「咲くよー、咲くよー、コスモスが、咲くよーよー」

潤「やめろって！幼少期の俺が頑張ったの！俺を馬鹿にしても、幼少期の俺は馬鹿にするな！」

彰「あらためて聞くとめちやくちやチューリップだなこれ」

潤「けどお前らあの時拍手したんだからな！忘れんなよな！取り消すなよな！」

俊「取り消さないよ」

潤「はあ、何も無いなら次行こうぜ、俺はもう疲れた」

○同・俊の部屋

司、彰、潤は部屋を漁り、それを眺める俊。

俊以外の三人の手には、雑多なアートが沢山。

彰「あらためて見ると凄いなこの部屋」

潤「とりあえず奥だ奥。俺も恥ずかしいもん探したい」

俊「趣旨変わってるじゃん。7億探すんですよ？」

潤「だってもう見つかる気しなくなってきたよ。だからとりあえずはさっきの復讐だよ。お、これなんかいいじゃん」

潤、棚の奥から、小さな絵を取り出す。お世辞にも上手とは言えない絵で、そこには人間らしきものが3人。

俊「ああ、それ」

潤「恥ずかしい？」

俊「あー、えっと、恥ずかし懷かし微笑ましい」

潤「なんだよそれ」

俊「これさ、3人だよ。これが潤でこれが彰、それでこれが司。覚えてないかな？彰がマジックショーやるって言ってさ、そしたら何故か潤が横で歌いだして、しまいには司も乱入して、なんだったかの演技みたいの始めて。そんなカオスを見てるのは俺1人だけで。それで途中から好き勝手やってるの羨ましくなって、俺もこの絵描きだしただ。覚えてるでしょ？」

潤「いや、全然覚えてない」

俊「うそ、結構楽しかったのに」

彰「だってそんな感じのこと、よくやってた気するもんね」

俊「けど確かさ、こんな感じの絵よく描いてたんだよ。他のやつどこ行ったかな。……あ、そうだ、お前らに全部あげてたんだ

よ！今どこある？」

黙り込む司、彰、潤の3人。

俊「まあ、そうだよな。持ってるわけないわ。けどお前ら俺の絵褒めてくれるし、くれくれってうるさいからさ、あげてたのに」

司「……そういや」

潤「どうした？」

司「いや、俺その絵貰った記憶あるわ。それで、園の壁に飾らせた」

彰「そうだ、俺もそれ見て真似した！」

潤「あー、俺も覚えてる気がする。最後の方壁が俊の絵だらけで埋まってさ」

司「そうだそうだ、それだ」

潤「じゃあ全部置いてっちゃったんだな青空園に」

彰「……なんか色々思いだすな。俺ら全然やらないけど、大掃除と違って意外と楽しいのかもね」

潤「あー、思い出の品とか色々出てきてな」

彰「そうそう、ほんとこんな感じでさ。今年

から毎年やることにしようか。全員で順番に各部屋回ってさ」

潤「こうやって喋ってばっかで、全然進まないやつな」

彰「そうそう」

司「もう2度としないだろこんなこと」

冷たく言い放つ司に、他の3人はまた黙って。

司「俺らがこうやって一緒に住むのも、もう終わりだろ？」

彰「……あのさ、ほんとにほんとに、いるのかな？この中に宝くじ泥棒なんて」

司「いるだろ」

彰「けどもしかしたらだよ！そいつも悪気なんてなくて、ちよつとしたいたずら心で、隠してるだけかもしれないじゃん？」

司「じゃあなんで名乗り出てこない？」

彰「それはだからほら司がさ！そんなに、ギスギスした空気出すから！名乗り出てきづらいつて、流石に」

司「7億だぞ？1万2万の話じゃねえんだ！
7億なんだよ！へらへら盗んでいい額じゃ
ねえんだよ！俺らの人生変わる金だろう
が！」

彰「それはそうだけど！それで俺らがこんな
空気になるのはおかしいって！これまで仲
良くやってきたじゃん？こんな喧嘩なんか、
一度だってしなかったじゃん！」

司「じゃあ分かった。本当にこれが最後のチ
ヤンスだ。俺達の7億を盗んだやつ、名乗
り出てくれ。イタズラでも本気でも、もう
どうだっていい。今、名乗り出さえすれば
全部許す。7億の配分もそのまま。裏切り
者含めてきっちり4等分。それで終わりだ」

4人の間に沈黙が流れる。
しかし誰も名乗り出ない。

司「……だからこういうことなんだよ」
潤「彰、」

彰、助けを求めるように潤の方を振り
向いて。

潤 「ごめん、俺もさつきまでヘラヘラしてたけど、目え覚めたわ。いるんだよ、俺らの中にクソ野郎が一人。思い出とか友情とか、もうどうでもいいわ。俺はそいつのこと、もう許さない」

潤、彰の目を見つめて。

その時、司、ふとプリンターに目を止める。

その視線に気づいた俊、その瞬間何かを思い出して。

俊 「あ、ちよっと待って！そこは！」

司、プリンターのスキャン部分をガバリと開くが、何も挟まっていない。

俊、それを見て驚き、しかし安堵。

司 「どうした？」

俊 「……いや、そこに丁度描きかけのさ、作品挟んであったから、ただそれがなんか恥ずかしくて、未完成のやつってあんまり見せたくないもんでさ」

潤 「こういうのって割ってもいいよな？」

潤、陶器のような作品を手を持って
いる。

俊「え、」

潤「どうせ1円の価値も無いもんだし、疑い
晴らすためにもいいだろ」

潤、間髪入れずに床に叩きつけ、割っ
てしまう。

声も出ない俊。

○同・司の部屋

棚には映画のDVDやシナリオブック
などが数々。

潤「やっぱ司の部屋も無いな」

司「当たり前だ」

潤「じゃあ犯人も決まりかな」

彰「え、」

潤「そう、お前じゃないかなって。俺は思っ
てるけど」

彰「……どうして？」

潤「どうしてって、こんだけ調べても、誰の

身体からも誰の部屋からも出てこない。あと調べてないのはお前の部屋のマジックグッズだけ。あの中のどっかにあるって考えるのが自然だろ。それにお前だけさっきから、様子がおかしい」

彰「別に、様子なんかどこも」

潤「なんでそう執拗に、当たりくじの行方をはぐらかして、うやむやに終わらせようとしてんだよ？もうみんな気づいてる。お前だろ？もう認めろよ、楽になる」

彰「…俺じゃない」

司「なんだっていいから、早く当たりくじだけ出してくれ」

彰「俺じゃないって！」

司、彰に詰めより、低く小さな声で。

司「俺は本気で、お前の部屋のもん全部ぶっ壊して、鳩も全部殺して調べあげるからな？」

彰「…俊」

彰、俊に助けを求めるが、俊は目をそ

らしたまま。

彰「なあ俊、俊、俊って！分かるだろ？俺の
言いたいことが！おい！」

彰、俊に駆け寄るが、潤に間に入られ、
止められ、壁に向かい投げられる。

壁にぶつかり、うずくまる彰。

彰「…じゃあもう、どうすればいいのかわ
かんねえよ」

司「それは認めるってことだな？」

彰「いいのか？今から話す俺の話のせいで、
お前ら全員、めちやくちやになる」

潤「ごちゃごちゃ言ってねえで早く出せよ！」
彰、ポケットからゆつくりと小さな紙
を取り出す。

それは宝くじで、記されているのは当
選番号。

潤「お前、それ、」

潤、目を見開いてそれを見、驚く。
司、それをひったくり、番号を確認。

司「これだな」

彰「違う。ひっくり返してみろよ」

司、その紙をひっくり返すと、そこには白紙。

彰「それは今朝、俊の部屋で見つけた」

司、潤の2人、俊の方を振り向く。

だが俊は顔を下げたまま何も言わない。

彰「裏が白紙で、けど表は当たりくじになってて、意味が分かんなくて、とりあえずトイレに隠した」

○回想 シェアハウス 俊の部屋

1月3日 早朝

潤に言われ、俊の部屋で俊を起こすため声をかける彰。

だが中々起きない俊。

彰、ふと近くのプリンターのスキヤン部分を開けてみる。そこには裏が白紙の当たりくじ。

少し考えるが理解が追いつかず、一旦俊の部屋を出、トイレの便座の裏にそ

れを隠す彰。

彰、再び俊の部屋に戻る。

目を覚ます俊。

○シェアハウス 司の部屋

彰「これはあくまで推測だけど、きっと間違いないんだろ？あの当たりくじは、俊が作った偽物だ」

うつむいたままの俊。

彰「それがきつと制作途中で出来た失敗作なんじゃない？だからさつき司にプリンター開けられた時さ、俊焦ってたんだよ」

司「そういうことか」

潤、俊に駆け寄り、優し気に声をかけて。

潤「おい、どういふことだよ、嘘だよな？全部彰のでまかせだよな？あの当たりくじ、本物に決まってるよな？おい、なんか言えよ！」

俊「……ごめん」

彰「そりや言いだせないよな。みんな7億手に入ってたって思ってるんだもん。それが全部幻だったなんてさ」

俊「……悪気はなくて、ほんのイタズラのつもりで、俺、」

○回想 シェアハウス リビング

1月1日 夜

楽しく飲んでいる4人。

俊、ふとテーブル下の宝くじ入り封筒を手に、こっそりと自分の部屋に。

○回想 同・俊の部屋

くじの確認後、パソコンで当たりくじを作り始める。

プリンターにて印刷、両面印刷を忘れ、それはスキャン部に挟み、もう一度印刷し直し。

偽物の当たりくじが出来上がる。

外れくじを1枚抜き出し、そこへそつ

と偽物を差し込む俊。

○シェアハウス 司の部屋

俊「ほんとはすぐ、嘘でしたって、冗談でしたって言うつもりだった。けど予想以上にみんな喜んで、興奮して、どんどん言いだせなくなって」

○回想 シェアハウス リビング

1月2日 夕方

1等が当選したと、はしゃぎまわる司、

潤、彰の3人。

それを見ながら、無理矢理に興奮する
ふりをする俊。

○シェアハウス 司の部屋

俊「ごめんなさい、ごめんなさい」

司「そんなことじゃねえかと思ってた」

潤「……ふざけんな、ふざけんな！こっちは！

は！7億手に入ったかと思ったんだぞ！」

俊「だから今日！勇氣出して！土下座でも何
でもして許してもらおうと思ったんだ！：
：けど、今日起きたら、こんなことになっ
てて、誰かがあの偽物を、盗んでて、」
彰「……盗んでたのはお前じゃないのか？」
俊「違う、それは俺じゃない」

潤、突然に部屋を飛び出す。
そしてギターケースを片手に戻り、中
からギターを取り出し、ギターの中か
ら一枚の紙を取り出してそれを投げ捨
てる。

彰が拾うと、それは紛れも無く偽物の
当たりくじ。

彰「お前が、」

潤「もうどうだっていいよ。偽物なんだから？
それ。ふざけんな、ふざけんなよ！やっど、
やっど、こんな貧乏生活から抜け出せると
思ったのに！金持ちになれるって、思った
のに！」

沈黙の四人。

しばらくし、司が口を開いて。

司「正真正銘終わりだな。解散だ解散！もうほんとに無理だろ、こんな状態でここに住み続けるのは。楽しかったな今まで」

司、部屋から出て行こうと。

彰「どこ行くの？」

司「……だから出て行くんだよ。荷物は適当に捨ててといてくれ。もういらない」

彰「本当に辞める気？俳優目指すの」

司「辞めるよ。馬鹿みたいな夢はもう終わらだ。お前らはいつまでもそうやってたらい。この部屋から出て、それぞれ今よりもっと狭い部屋に住んで、いつまでも、いつまでも夢だけに麻痺して、夢に騙されて、歳だけ取ってりゃいい」

彰「まだ俺ら23だよ」

司「……もう23なんだよ。18からここに住んで、5年間、バイトばかりして。その合間縫って必死に、必死に努力して。5年もありゃ、自分に才能無いことなんか分

かる。もう夢叶えたいとか、そういう話じやねえんだよ俺らは。現実から目背けるためそれだけに、夢使ってるだけだ。……それで残った唯一の希望が、こんな宝くじだけで。馬鹿みたいだろ、ほんとに」

彰「けどこの五年間は、楽しかった。本当に楽しかった」

司「楽しかっただけだ」

彰「じゃあそれでいいじゃん。それだけでいいじゃん、それだけがいいじゃん。……そんなに金って、必要なのかな」

司「当たり前だろ」

彰「そしたらなんでお前は、怒ってないんだよ？」

司「は？」

彰「現実だ金だって言ってるくせに、当たりくじ盗まれたこととか、当たりくじが偽物だったこととか、1億や2億って金が、手元から無くなったのと同じくらいの衝撃のはずだよな？ 今のお前にとっては。なのに

全然、平気な顔してる。それってなんで

だ？」

司「……盗まれた辺りから、薄々そんなこと
だろうと思ってた。だからショックだなん
だというよりも、正直呆れてる。呆れ倒し
てる。そういうことだ」

彰「それでここ出ていく？荷物も何も持た
ず？どこに？」

司「友達の家でも何でも、しばらくはなんと
でもなる」

彰「その後は新しい部屋探すのか？それから
どうやって生活する気だよ」

司「ある程度の蓄えならある」

彰「お前にそんなの無いことぐらい俺らは知
ってる！」

司「……今まで通り普通にバイトしてりゃあ、
それぐらいいくらでもなんとかなる！」

彰「バイトはもう辞めたはずだろ？」

一瞬黙る司。

彰「司、やっぱりなんか変だよ。ずっと。昨

日からずっと、司なんでさ、俺らのこと、
けしかけるの？」

司「……けしかける？」

彰「わざわざ重たい空気出してさ、俺らの仲
がギスギスするように。なんか揉め事けし
かけてるだろ。現実見つめなおして、夢追
いかけるの諦める。百歩譲ってそれは分か
るよ。けどさ、わざと喧嘩別れしようとし
てる。俺にはそんな風を感じる」

司「何が言いたい？」

彰「最初に疑問持ったのは昨日の夜だよ。俺
らが宝くじ確認する時にさ、司言ってたよ
な？当たるわけないって。けど誰よりもギ
ャンブル好きでさ、そもそも毎年の宝くじ
の共同購入を持ち掛けてきたのも、司じゃ
ん。なのに当たるわけないって、おかしい
よ。まるで絶対に当たらないこと知ってた
みたいだ」

司「……だから何が言いたい？」

彰「毎年さ、4人で10枚買って、それとは

別に、司も1人で10枚買ってるよな？その10枚って今どこにあるの？」

司「どっかにあるだろ、その辺に」

彰「無いんだよ。この部屋は今散々探した」

司「じゃありビングに！」

彰「そこも散々探したろ！」

司「そしたら、もう捨てたんだよ！勿論全部外れたから、捨てた！」

彰「どこに？」

司「その辺の適当なゴミ箱だろうが！」

彰「さつき俺らはゴミ箱までひっくり返して探したろって！無いんだよ！この家に司の宝くじが！」

司、どこかへ逃げようと。だが彰が腕を掴んで。

彰「俊か、潤、どっちか覚えてないか？今年の宝くじ、俺らは連番かバラ、元々どっちを買う予定だった？」

潤「……やっぱそうか、今年連番買うって話だった」

彰「けど俺らに渡されたのはバラの10枚だった」

俊「あ、」

彰「どうした？」

俊「いや、そーいや司やけにさ、7億のこと、10億って言い間違えてたなって」

彰「連番で当たってれば、前後賞合わせて10億。あと俊さ、俊が偽物の当たりくじ入れる時、紙封筒はどうなってた？」

俊「どうって、もう開いてて、多分誰かが開けたのかなって」

潤「俺は開けてない」

彰「俺も開けてない。ってことは司お前が、バラの方は外れてるってことを既に確認してたってことになる。」

なあ司、お前が昨日バイトを辞めてなかったとしたら、お前はあの時どこに行ってた？そうじゃなかったら、なんのためにわざわざ、バイト先に行く必要があった？」

目を合わせず、黙り込んだままの司。

彰、潤と俊を見て。

彰「行こう」

○司のバイト先 更衣室

司のバイト先の更衣室に入ってくる司。

先にいた他のバイトに声をかけられる。

バイト「お疲れ様です。あれ、司さん今日

シフトでしたっけ？」

司の後ろからズロズロ入ってくる彰、

潤、俊を見て、言葉が止まるバイト。

司、ゆっくりと自分のロッカーを開け

る。中には宝くじの入った紙封筒。

○シェアハウス リビング

テーブルの上で宝くじを確認していく

潤と俊。

その横で、彰と司はそれを眺めて。

潤「……184組の、1、3、6、8、9、

……5」

俊「連番だからその前後の、136894と、

1 3 6 8 9 6 も」

潤 「…：10億！」

両手を上げ、大興奮する潤と俊。

潤 「これ本物だよな！今度こそ！おい司！お前これがまた偽物だったら！」

司 「本物なんだよ」

○回想 シェアハウス 司の部屋

1 2 月 3 1 日 夜

1 人部屋で宝くじを確認する司。

自分の分のバラ、確認するが全てはズレている。

ふと、共同購入した連番の方を開ける。当選している宝くじ、手が震えて。

それを持ってバイト先へ走る司。

○回想 司のバイト先 更衣室

司、ロッカーに当たりくじの束を隠す。

○シェアハウス リビング

彰「昨日の夜出かけたのは、やっぱりこの当たりくじを確認しに行ったわけ？」

司、頷き。

司「だからまず間違いなく、俊がいたらずらで作ったんだろうなって思った。それで盗んだのは彰か潤だろうって。けどそんなのはどうでもよくて、とりあえずこの状況利用して、揉め事焚きつけて、後は1人で10億持って、お前らとはもう2度と会わない。そのつもりだった」

潤「ざまあみろだな、まったくよ。それでどうする？10億だぞ？3人で分けても1人3億3000万？やばいやばいやばい」

司「3人？」

潤「お前が勘定に入らないのは当たり前だろ。なんたって俺らを騙して裏切って、独り占めしようとしてたんだからよ」

司「待てよ、共同購入したんだろうが！」

潤「はあ？当然の報いだろうが！」

俊「待ってよ！そんなの言ったら潤だって盗

んだわけだよな？ 独り占めしようって！」

潤 「あれは偽物だっただろ！」

司 「そんなの関係ねえんだよ！」

潤 「そもそもてめえが偽物なんか作らなきゃ
な！ ハナから盗んでねえんだよ！」

俊 「俺のはただのイタズラだろ？ それにもし
司が初めからこの本物を見せてたら、きつ
と潤は同じように盗んでた！」

口汚く罵り合う潤と俊と司。

そんな3人を見ながら、顔を歪める彰。

彰、テーブルの上の当たりくじ3枚に
手を伸ばし、掴むと、その3枚をその
ままビリビリに引きちぎり始める。

潤 「……お前！ 何して！」

彰 「いいかげんにしろよ！」

一瞬の沈黙が4人の間に流れ。

彰 「こんなのが、こんなのがあるからいけな
いんだろ？ 俺、嫌だよ。金で、たかが金で、
金程度で、俺達がさ、嘘ついて、罵り合っ
て、バラバラになっていくの。今までの毎

日とか、楽しかった日々とか昔からの思い出とか全部！無かったことになるの。だもしたらこんな金、俺達には要らない」

4人の間に、また沈黙が流れ。

司「……悪かった」

他の3人、司の方を見て。

司「許されようとか、そういうんじゃない。ただ謝るのが、先だった。4人で買った宝くじを、入れ替えて、騙して、申し訳なかった」

司、深く頭を下げて。

潤「……俺も、結果的には偽物だったけど、それでも、盗んだことには、独り占めしようとしたことには、変わりなくて。ごめん」

潤、頭を下げる。

俊「俺も、イタズラとはいえ、度を越してた。ごめんなさい」

俊、頭を下げて。

彰「みんな、ちょっとは頭冷えた？」

顔を上げる3人。

彰「これで誰も、この家出て行かなくていいね？」

司、彰を見上げて。

彰「今日も明日も明後日も、いつも通り、4人でいようよ」

4人、それぞれ頷き、軽く微笑んで。

彰「それで最後に1個提案があつてさ」

彰、スマートフォンの画面を他の3人に見せながら。

彰「俺らはさ、まあなんとか、全然金はないけど、4人で楽しく暮らしながらさ、したいこととか出来て、夢が追えてるわけじゃない。けどこれってやっぱさ、幸運なことみたいなんだよ。俺らみたいな児童養護施設上がりの中にはさ、もっと苦労してて、したいこともまともにできなくて、その日1日を生きるだけでも精一杯のやつらがいるみたいで。

けどそれってさ、悔しいじゃん。こいつら1人1人にもそれぞれやりたいことがあって、夢があって、諦めきれなくて。ってことはこいつらは、俺らなんだよ。だから俺らは10億をさ、俺らじゃなくて、何十人、何百人の俺ら、これからの何千人の俺らのために、使おうよ。

この団体がさ、寄付募ってて、集まった寄付金を、全国の児童養護施設上がりの苦しいやつらの補助に使ってくれるんだって。どう？俺らの10億を、ここに託すってのは」

スマートフォン画面には、恵まれない児童養護施設卒の若者への寄付を募るページが。

司「うん」

潤「俺も、いいと思う。まあ俺らは確かに、金なんて大して無くても、楽しくやってけるしな。幸せだ」

司「どの口が言ってんだよ」

潤「お前もな」

司と潤、笑って。

俊「けどさ、10億は、いま彰が破いて、」

彰、テーブルの上の外れくじの束から

3枚を取って見せる。

それは当たりくじ3枚。

彰「すり替えマジック。俺の得意技」

彰、無邪気な笑みを見せる。

彰「あと司さ、俳優の夢辞めないよね？」

司「辞めない。辞めるの辞めた。二度と辞め

ない」

○夕暮れの道

道を歩く4人。何かの帰り道で。

潤「無くなったな」

司「無くなった」

俊「無くなったね」

潤「10億が一瞬で。正直まだ若干未練が」

司「けどあの10億が散り散りになって、何

千人の俺らの助けになっってくれるんだろ？」

俊「何万人の俺らかもね」

道の向こうにスーパーが見える。

彰、スーパーを指さして。

彰「ちよっと寄っていい？」

彰、スーパーへと走る。

× × ×

彰、手にはスーパーの袋がぶら下がり。

司「なにそれ？」

彰「ビールビール。俺のおごり」

俊「おー！やった！しかもそれ結構高いやつ

じゃない？」

彰「4本で750円くらい。750円」

潤「お前いいやつ過ぎるな。結局お前1人だ

けじゃね？今回の事件で悪いことしてない

の」

彰「いや、これは3人への謝罪のビールだか

ら。というより補填。750円の」

司「どういう意味？」

彰「いや、俺さ、共同購入の時の750円。」

まだ払ってなかったのよ。渡してないでし

よ？俺司に」

司「……あー、確かに」

俊「え、けどあの時司、もう貰ったって」

司「いやあの時俺10億独り占め状態だったから。そんなのどうでもよかった」

彰「だからそもそもさ、俺10億の分け前貰う権利、無かったのよ。いつ思いだされるかなって、そしたら俺勝ち目無くなって。」

そう言うわけでみんなより、10億に執着してなかったのよ。俺もらえる金じゃないから、俺だけ幻の金だから。そんなわけで俺は、とにかく3人から10億取り上げて、仲直りだけ、したかったって話。……怒る？」

潤「……俺らは怒れねえよ」

司「だな」

俊「うん」

司「とりあえず帰って飲むかー」

潤「飲もう飲もう！」

俊「そうしよう！」

彰「10億なんて無くても、750円あれば、俺ら幸せになれるから、大丈夫だよ」

彰、ビニール袋を掲げて。

俊「だね」

潤「だな」

司「その通り」

夕暮れの道、笑いながら歩いていく4人。

おしまい